

家庭科教育の昭和史とともに生きる―宮原小治郎小伝

## 第一部 あるジャーナリスト の生い立ち (2)

佐々木 享

(名古屋大学教授)

動乱の明治維新に生まれる

のちに家政教育社を興し、『家庭科教育』（創刊時は『家事及裁縫』）を創刊した宮原小治郎は、戸籍によると、明治二年一月二十六日に長野県更級郡村上村に、平民・宮原治作の長男として生まれた。維新の新政府が慶応を明治と改元したのは前年九月八日だったから、小治郎は事実上明治とともに生まれ育ったと言える。

更級郡村上村は、今は埴科郡坂城町の一画である。信越線上田から二つ目、坂城で下車したところが坂城町で、村上の集落は千曲川を渡った西岸に広がっている。長い間、更級郡に属していた村上村は、一九六〇（昭和三十五）年に、いわば郡の壁を越えて坂城町に合併したのである。しかし、小治

郎が生まれた当時はまだ村上なる村はなく、長野県も成立していなかった。

今の長野県域をおおう信濃国は、幕末・明治初年までは極端な小藩分立で、一〇万石から一萬石程度の一一の小藩、他国に本領のある三つの藩領、幕府直轄の天領とが入り組んでいた。現在の坂城町区域について見ると、南は上田藩に接して、旧坂城町、旧中之条村は幕府直轄、旧村上村の村域は松代藩に属するというぐあいである。旧村上村は網掛村、上五明村、上平村、小網新田村の四つの郷村から成り、小治郎の生家は網掛村で農業を営んでいた。

明治初年の信州北部には、一揆、騒動が頻発していた。二年七月には飯田の町人や近隣の農民一万三、〇〇〇人による世直し一揆、八月には小県郡奈良本村で起こった一揆が上田町内の打ち毀しとなり（上田騒動）、これが月末には小諸藩領の川西騒動に飛び火した。翌三年十一月には、藩札の価値下落に怒った松代藩領上山田村民の世直し一揆（松代騒動）が近隣に広がり、これには上五明、網掛、上平の農民も加わったという。松代騒動は年末には須坂藩にも波及した。小治郎はこうした動乱の時代の子であった。

幕藩体制の崩壊と明治政府の統治体制への移行を象徴する廃藩置県により北信部に旧長野県が成立したのは明治四年、筑摩県が飛騨三郡を岐阜県に切り離して旧長野県に合体して

今日の長野県が成立したのは一八七六（明治九）年である。小治郎の生まれた網掛村を含む近隣五か村が合併して村上村となったのは、全国一律に町村制の確立した八九（明治二十二年）四月であった。小治郎が後年網掛村と号したのは、こうして消えていった村の名にちなんだものであろう。

#### 十四歳で授業生となる

小治郎の幼少期は、残念ながら皆目分かっていない。一八七二（明治五）年に近代的学校制度の創設を目指した「学制」が敷かれ、小治郎の生まれた地域にも、翌七三年に、網掛・上平・上五明・力石・新山・上山田の六か村による第四六番小学区六郷学校が設置された。この学校から翌七四年に第四五番小学区村上学校（網掛・上平）が、続く翌年に第八四番小学区五明学校（上五明）が分離独立した。小治郎が学んだと思われる村上学校は、当初、網掛村内の福泉寺と上平村内の源忠寺を二か月交代で学舎とする変則的なたちで発足し、さらに、七六（明治九）年から七九（明治十二）年までは児童の教育を五明学校に委託したと言われる。村上学校が村民の努力で初めて独立の校舎を持ったのは八一（明治十四）年であった。小治郎は、校舎さえもまだ安定しない時代に初等教育を受けたわけである。

『村上小学校百年誌』（一九七四年）の学校職員名簿の一八八三（明治十六）年の項に、村上学校教師として宮原小治郎

の名が見える。何年間か教育を受けた小治郎は、十四歳で母校の教員となったわけで、これが今日確認できる小治郎の最初の足跡である。当時の習わしで授業生と呼ばれていたであろう。いずれにせよ、幼少期から抜群の頭脳を持っていたことが推測される。

#### 小学校教師となる

小治郎の名が村上学校に見えたのは八三年のみで、八四年から八七年までの彼の動静はつかめない。長男であったから農業に従事していたのであろうか。

『坂城小学校百年誌』（一九七九年）によると、小治郎は十九歳となった一八八八（明治二十一年）年から、生家の隣村にある埴科郡第二番学区尋常小学坂城学校の教師となったことが知られる。いわゆる代用教員とはいえ、当座の腰掛けではなく、この年から長い教員生活が始まった。村上学校より児童数も規模も大きい坂城学校は、小治郎が赴任した年、新校舎を増築中であった。

松本市の開智学校、佐久市（旧中込村）の成知学校など、長野県では明治初年に洋風の立派な小学校校舎が建築され、今に遺されている。坂城町の格致学校歴史民俗資料館も、一八七八（明治十一）年に建てられた中之条村の格致学校校舎を利用した洋風建築である。小治郎の勤務した坂城学校が八八（明治二十一年）年に増築した校舎も、東西五間、南北八間

の三層の洋風建築であった。

坂城学校は八九年に坂城尋常小学校に、九二年には高等科を設けて坂城尋常高等小学校に改称し、一九〇二(明治三十五)年には校舎が移転した。これに伴い、三階建ての旧坂城学校校舎には坂城町役場が移転してきた。この町役場の建物は、一九五〇(昭和二十五)年に三層部分を取りこわしたけれども、一九五五(昭和三十)年に役場が新庁舎に移転するまで、じつに六七年にわたって現役として活躍した。

旧坂城町(明治初年までは坂木村)には、多数の筆塚が遺っている。寺子屋が栄え、愛されてきた証である。子どもたちには読み書きを学ばせることを大切にしてきた村民の心意気が、洋風三層の立派な校舎を建てたと云ってよい。

この坂城学校新築中の一八八八(明治二十一)年三月には直江津線の長野・上田間が開通して坂城駅が誕生、同年十二月には上田・軽井沢間が開通して直江津・軽井沢間が全通した。校舎新築、鉄道開通という晴れがましい仕事の進捗を見ながら、若い小治郎は新時代のいぶきを敏感に読みとっていたに違いない。碓氷峠のアプト式鉄道が完成、高崎・直江津間が全通し、信越線と改称したのは九三(明治二十六)年だった。

しかし、小学校教員時代の小治郎につき分かっていることは、きわめてわずかにすぎない。一八九二(明治二十五)年

五月に検定で長野県で小学校教員免許状を授与され、七月には晴れて長野県埴科郡坂城尋常小学校訓導に任ぜられた。二十三歳であった。彼の履歴書の学歴・職歴はこの年の免許状授与から書き始められている。人生の最初の節目としての自負がこめられているように思われる。九五(明治二十八)年に埴科郡屋代町の堀内いくと結婚した。小治郎二十六歳、いく二十一歳だった。

#### 文章修業を始める——大和田建樹との邂逅

小治郎は、生涯にたくさんの文章を書き遺した。一九〇二(明治三十五)年に始まり『家事及裁縫』の創刊(一九二七年)まで続けられた『婦女新聞』への寄稿は、時代に制約された美文調のものから、しだいに言文一致体へ変わり、紀行文が多い。しかし、三十代半ばに『信濃教育会雑誌』に寄せた論説文は、論旨の構造がしっかりしているだけでなく勢いがあり、雄渾なものだと言ってよい。昭和期になって『家事及裁縫』に書いた多数の文章は、解説記事か随想の類である。目配りの広さ、読者を説得する論旨展開のこまやかさは驚くほどである。筆は早かったと見られる。しかし小治郎は、後述のように、『家事及裁縫』創刊以前は体操科の教師であった。少年時代の彼の文章修業の様子は皆目分かっていないけれども、鉄道唱歌などの作詩者として今に知られる大和田建樹について詩歌・文章の修業をしたことは分かっている。

『家庭教育』誌復刻版の「別巻」に寄せた「解説」で、小治郎と大和田建樹との邂逅が小治郎の上田高女時代（一九〇一年以降）であろうと書いたのは間違いだ。小治郎自身が、「姨捨の帰途大和田大人の来遊せられて己が家に引とめまつり」、月をめでの歌をつくったことがあったのは「去にし明治卅年（一八九七年）の頃なりけん」と書いているからだ（『婦女新聞』第三三三号、一九〇六年九月二十四日）。

他方、『大和田建樹先生の足跡』（一九五五年）には、一八九六（明治二十九）年九月十九日に、「信州埴科郡教育会に講義し翌日冠着山に登り姥捨山に月観をなす」とある。大和田は翌九七年には信州松代で、同年十月には信州小諸で講義するなど、この時期にたびたび信州を訪れている。しかし小治郎宅に立ち寄った蓋然性が高いのは、小治郎も所属する埴科郡教育会の講義の折であり、その年については彼の記憶違いの可能性がある。そのいずれにせよ、小治郎の坂城小学校教員時代である。話を聴こうとする者が多かったからこそ大和田はたびたび信州に招かれたに違いない。その好機をとらえて、私淑するようになったところに、小治郎の文章修業への熱誠をうかがい知ることができる。

後年『婦女新聞』を興す福島四郎が上京して大和田の書生となったのは九四（明治二十七）年だと言われるから、小治郎は福島に遅れること二、三年で大和田の知遇を得たことに

なる。もちろん、小治郎―大和田―福島という連環が彼の人生を変えらることになるなど予想もなかったに違いないが。

#### 体操専科の免許をとる

若き日の小治郎にとって、しかし、詩歌・文章の修業はいわば趣味の域に属した。彼が目指したのは、彼の後年を知る者にとっては意外なことに、国語・漢文の教師ではなく、体操の教師であった。

彼が体操科を専門にしようとした理由は分かっていない。写真に見る彼の体格ががっしりしている。しかし、身体がじょうぶで身体を動かすことに自信があったというだけではあるまい。体操は、唱歌、手工などと同じく、寺子屋時代の初等教育にはまったく存在せず、近代的学校教育を確立する過程で西欧から導入された新しい教科である。それだけでなく、小治郎自身が学んだと思われる時期の村上学校ではまだ体操は実施されていなかった。身体に多少の自信があったとはいえ、いわば未知の教科の未来に可能性を読みとり、これを自らの専門にしようとしたところに、小治郎の進取の気性をかいま見ることができよう。

一八九八（明治三十一）年二月五日付で、小治郎は検定により長野県から小学校教員免許状（体操専科正教員）を授与された。二十九歳になった小治郎の新しい時代が始まろうとしていた。